

9世紀後半にカシミールで活躍したニヤーヤ（論理）学派の学匠にジャヤンタがいる。ジャヤンタは文法学の著作や戯曲も著し、すぐれた詩人としての資質をそなえていたが、何よりもかれが異彩を放つのは、3～4世紀に成立したニヤーヤ学派の展開において果たした論理学者としての役割においてである。本論文は、それゆえニヤーヤ学者としてのジャヤンタに焦点をあて、主著である『ニヤーヤ・マンジャリー（論理の花房）』を中心資料としながら、真作問題が残されていた小作品『ニヤーヤ・カリカー（論理の蕾）』を詳細に分析する。論文の目的は、これにより同作品の真贋問題を解明するとともに、綿密なテキスト解読と先行研究に対する詳細な批判的検討を通して、ジャヤンタが語り伝えるニヤーヤ哲学の特質を明らかにすることにある。

論文は、問題の背景と論文の目的を示す「序」につづき、第1章「ジャヤンタの著作問題と年代論」、第2章「ジャヤンタの学問観と『別のシャーストラ』」、第3章「ジャヤンタが語るニヤーヤ哲学の諸相—ニヤーヤ哲学史再構成にむけて—」、第4章「『ニヤーヤ・マンジャリー』と『ニヤーヤ・カリカー』」および「結論」とから成る。

第1章では、断片のみが伝わる『[ニヤーヤ・] パッラヴァ（[論理の] 小枝）』と先の『ニヤーヤ・カリカー』の両書をめぐっては、従来偽作説も唱えられていたが、それぞれの作品に対する詳細な分析と論書間の比較考察により、両書は『ニヤーヤ・マンジャリー』の著者であるジャヤンタの真作と推定されると結論する。『ニヤーヤ・カリカー』に関しては、同論の「定説」解釈、認識手段論、ならびに論の冒頭に置かれるマンガラ（吉祥偈）の問題などを根拠に Bhattacharya 他の研究者が偽作説を唱える。これに対して丸井氏は、第1章および第4章を通して、これらの偽作説の論拠とその背景を詳細に分析し、いずれも事実誤認あるいはテキスト校訂の問題に帰するもので、論拠たり得ないことを明らかにした。

第2章と第3章は、「六派哲学」の意味内容に関する再検討、「シャーストラ（学理、論書）」概念の批判的考察、ニヤーヤ哲学の16カテゴリーの第2に位置づけられる「認識対象」、とくにその4番目に位置する artha（対象）概念の変容に関する考察等を通して、ニヤーヤ哲学史におけるジャヤンタの位置づけを再検証し、きわめて注目される新たな知見をもたらしている。

以上のように、従来未解明であったジャヤンタの著作問題を解決するとともに、ニヤーヤ哲学史において果たした「古風」で、修道論的・解脱論的な立場を保つジャヤンタの思想的な特色を浮き彫りにした本論文の成果はきわめて大きく、ニヤーヤ哲学史研究における画期的な業績として高く評価することができる。一部にやや明快さを欠く論述はみられるが、本研究の画期的な意義を損なうものではない。

以上の理由により、審査委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するに値する業績であると判断する。